稲田さんのこと

斎藤澄三郎*

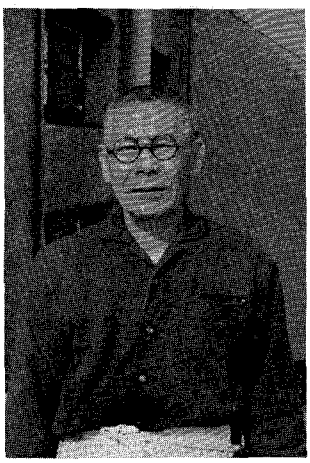
昭和30年秋から，花山天文台の宿舎で食事その他の世話をしておられた，稲田藤四郎氏が昨秋11月12日になくなられた．ここに15年に及ぶ稲田さんの花山生活の想い出をしるして，追悼の意をあらわしたい．

昭和30年といえば，戦時中から戦後にかけて細々とつづいていた花山での天文活動が地球観測年を前にして，性格を新たにし，規模を大きくかえはじめていた時期にあたる．天文台への道路も，今のような舗装されたドライヴ・ウェイではなく，ほとんどみんな歩いて通っていた．我々はまず，窓をあけ，風を入れ，倉庫同様であった室をととのえることからはじめ，ぼちぼちと太陽の観測の用意に取りかかっていて，交代で余儀なく自炊をつづけていた．このようなとき稲田さんが我々の前にあらわれたのであった．

稲田さん，我々のふだんの呼び方をいえば，稲田のオッチャン，調子づいていうときには，「小父上」,「稲田小父上」その他ありとあらゆる，敬称，縮小語尾変化をするが，その稲田さんは，明治25年7月22日，京都吉田二本松に生まれた．当時は鴨川堤にいたるまで，一面の田圃で，生家の農地はいまの医学部附近にあったという．吉田という土地柄，若いときからの学生びいきで，三高の私設応援団の有力メンバーであったらしい．

花山でのオッチャンの仕事は宿舎での食事の用意と，構内の清掃であったが，大工仕事などの小修理や，畑仕事にまで手をのばし，そのかたわらでは，盆栽や花作りをたのしみ，ある一冬は藪の中の雉を手なづけてみるなど，山の上の自然生活を味わっていた．一かどの板場さんであったというその腕前は，真白な前掛けをしめて，革の煙草入を腰に指した仕事姿にうかがわれるが，かぎられた費用と材料を前にして，多くの要望にこたえるためにその腕もいささか鈍らざるを得なかったのではないかと思われる．とにかく花山天文台にずっと家族的な親しさが醸されて来た理由の一つは，稲田さんの頑張っていた宿舎の食堂あたりに見出されるようである．

稲田さんの想い出の1つに残るのはその気の若さであった．親子あるいは孫ほどにも齢の差のある我々と同じ気分で応対していた．ボクシング，プロレス，ラグビー等の中継にはいつも眼をかがやかせ，TV画面の美女たちには拍手を送り，そのくせ一打逆転などという絶対のみどころには，胸がいたくなって席を外すということもしばしばであった．



下手の横好きとしか云いようのない碁も，暇をとらえては真黒にみえる程に石をおいてお相手をしてもらっていたが，盤外の舌戦は人一倍達者で，地口格言，悪口のたぐいの傑作集はその適切なことはここでかき表わし得ない程であり，天下御免の時間を大分昔にもどす「待った」と共に観戦者共をたのしませたものである．そのあいだにも，時間をきめて台長室へ何回となくお茶の用意をしに行くなど，「十姉妹に水をやるみたい」と冷かされながらも，自分できめた方式をまげない律義さを持っていた．

酒好きの多い花山には珍らしく甘党であった稲田の小父さんは，自分の作った粕汁2杯で首すじを赤くしてしまう程であったが，時には夜更けまで飲む我々は騒がしくて睡眠の妨げであったらしいが，少しばかりはうらやましかったようである．喜寿のお祝を花山で開いた宵には，グラス一杯のビールで顔を真赤にして，あちこちから集って来た昔なじみの花山のOBとの話をたのしんでいたのを想い出す．年に比べて元気であったのは我々の中に暮していたからであろうが，稲田さんが体の不調を突然口にしたのは昨年の5月半ばであった．朝おきてみると左半分がしびれているという．軽い動脈硬化症というので2ヵ月程京大病院に入院していた．涼しくなりはじめたころにはずいぶん元気になって「運動のため天文台で草とりでもしてみたい」というのをおもい止まらせるのに苦労する程であった．小父さんにとってすみなれた花山は我家以上のんびり出来る場所であったようだ．天文台にかえるのをたのしみに療養をつづけていたが11月の初めに胃内出血で倒れ，胃ガンの除去の手術をされたが，遂にかえらぬ人となられた．享年78歳であった．

稲田さんが花山にいた15年のあいだに，観測の設備が数多く強化され，仕事をする人々も多く集まって，研究活動が大躍進をしつづけて，飛騨天文台が新しく生まれ出るというエネルギェティクな時代であった．疾風怒

* 花山天文台

濤の日々のそれぞれの記録の中にうずもれている稲田さんや，若くして死んだ富永君などとの追悼はそのまま我々の若き日のそれであるような気がする．

気の若かった稲田さんはそれでも「わしはもう入るところが重森先生にたのんで作ってもろうてある」とかねてから口にしていた．重森先生というのは，稲田さんが長い間，親しくしていた京の造庭家の重森三玲氏である．その自慢していた稲田さんのお墓は吉田山の東，神楽岡町の，吉田町神道墓地にある．

雑　報

新周期彗星

愛知県一色町の小島信久氏は1970年12月27日(UT)光度14等の新彗星を発見した．周期彗星ニュージミン第II彗星を写真で捜索中に発見されたものである．その後の観測では，この彗星は新しい周期彗星で周期約6.1年近日点通過1970年10月6.994日（ET）である。

鳥羽（1971a）新彗星

茨城県土浦市の鳥羽健次氏は1971年3月8日早朝(日本時）にペガスス座に光度約 10 等の彗星状天体を発見し，翌9日朝再び観測して運動を確認し，東京天文台に通報された．東京天文台でも10日 早朝の観測で確認し，鳥羽彗星として発表した．初期の観測から求めた軌道要素と，概略の位置の予報は次の通りである．

T=1971 Apr. 17.270 ET　$\omega=152^\circ.38$, $\Omega=103^\circ.35$, $i=109^\circ.69$ } 1950.0

q=1.2328 A.U.

年	月	日	赤経	赤緯	△	r	Mag
1971	IV	29	$22^h11^m.4$	+03°36′			
	V	9	$22^h16.9$	−03 51	1.135	1.278	8.0
		19	22 21.6	−14 41			
		29	22 24.5	−30 42	0.794	1.389	7.6

（香西洋樹）

好評発売中

1971年版 天文年鑑

1971年の天文の出来事が一目でわかる天文年鑑

71年夏には久しぶりの火星大接近が観測できるので、今年はとくに火星の予報記事に力を入れてあります。グラビアにはピク・デュ・ミディ天文台(フランス)から送られた土星の新リング発見の写真や、オーストラリアで撮影された国産衛星「おおすみ」の写真をのせました。

天文年鑑編集委員会編

●B6判／122ページ／定価260円

天文用語事典

近刊予告

●B6判／250ページ

予定価550円/天文ガイド編

天文用語を、天体器械・写真、太陽・地球・月・こよみ・人工衛星・彗星、太陽系、恒星・銀河系の4項目に分類し、約500語を簡明に解説したハンドブックです。天文年鑑、天体観測ハンドブックとともに、アマチュア天文家は、ぜひ1冊そなえて下さい。

誠文堂新光社　東京・神田錦町1の5　振替東京6294